続・金谷健一のここが変だよ日本人の英語 最終回

金谷健一
岡山大学

本シリーズの最後として英語と米語の違いを取り上げる．日本人が英語を話すときに特に考慮する必要はないが，その違いが聞き取れれば英語の音声に関する関心が高まるであろう．

1. 基本的な違い

英語と米語の発音の最大の違いはアクセント音節の発音の仕方である．前回にもアクセントの音節では高い声を一気に下げ，直ちに反発させて高い音に戻すと述べたが，英音ではアクセントのある音節を他の音節よりやや短めに鋭く落下させ，それを非常に弱い音で瞬時に反発させて高い音に戻す．それに対して米音では，アクセントのある音節を他の音節よりやや長めに発音し，それを高い音に戻すとき，はっきりと声を出す．その結果，英音は直線的要素からなる不連続信号，米音は曲線的な高低の連続信号のような印象を与える．だから最初の単語を発音した瞬間に，その人が英国人か米国人かわかる．

以下ではそれ以外の母音や子音の発音の相違を取り上げる．もちろん英米ではっきり分かれているとは限らず，同じ国でも地域や階級によって相違点が多い．以下は「どちらかといえば英/米でそう発音する傾向がある」と理解してほしい．

2. 真似る必要のないアメリカ英語

r の音

米音の最大の特徴は母音に続く r の音である．スペルに ar, ir, ur, er, or を含む語の r は英音では発音されないが，米音では口の中で舌を反らせて発音される．例えば girl は英音ではガール [gəːl] だが，米音では [gə*r*l]（この r 音をイタリックで [*r*] と表す）となり，ゲロロのように聞こえる．しかし，これを日本人が真似るとどうしても妙に聞こえる．アメリカに長期滞在して習慣になった人以外は真似ないほうがよい．

一方，r 音が語末に来る場合，例えば store, door, more は英音ではそれぞれストー [stɔː]，ドー [dɔː]，モー [mɔː] であり [注 1)]，米音では [stɔː*r*]，[dɔː*r*]，[mɔː*r*] となる．しかし，日本人はこの r 音がうまく発音できないので，アで置き換えてストア，ドア，モアと読む習慣が定着している．通じないことはないが，やはりストー，ドー，モーと発音するのが無難である．

t の音

これもアメリカ人の癖であり，母音に挟まれた t は d の音に近くなる．だから party はパーディー，better はベダー，twenty はトエニーに聞こえる．これも真似ようと努力する人がいるが，アメリカに長期滞在して習慣になった人以外は，t をはっきり発音するのがよいと思う．

アの音

米英で差が目立つのは子音の前の a の音が米国では [æ]，英国では [ɑː] となる単語である．例えば ask は [æsk| ɑːsk]（仕切りの前が米，後ろが英）となり，この対立は answer [ǽnsə*r*| ɑ́ːnsə], ant [ænt| ɑːnt], castle [kæsl| kɑːsl], task [tæsk| tɑːsk] などかなりある．can の否定の口語 can’t [kænt| kɑːnt] も聞くと差が大きい [注 2)]．

日本語では歴史的な由来か，例えば cast [kæst| kɑːst] は「出演者」の意味では米音のキャストが，インドの「カースト制」とか「鋳型」のカストは英音が採用されている．

日本人にはどちらでもよいが，[æ] の発音が難しいので [ɑː] を勧めたい．ただし口を通常より大きく空ける必要がある．日本人は口を大きく空けることに心理的な抵抗が大きいので狭いア [ʌ], [ɔ] になりがちである．

オの音

これも目立つ米英の差である．例えば not [nɑt| nɔt] は米音では口の前を大きく空けるので，アの響きのある明るいオの音であるが，英音では口の奥を広げるように発音するので日本語のオに近い音になる．どちらにせよ口を大きく空ける．

日本人が米音を真似て [ɑ] を言うと，口の空け方が不足して狭いア [ʌ] になり，not が nut に聞こえがちである．だから私は [ɔ] のほうを勧める（ただし口の奥を十分空けないと狭いオ [o] になり，not が note に聞こえる 注 3)）．例えば college [káliʤ| kóliʤ] は口を大きく空けてコレッジと言えばアメリカでもイギリスでも通じるが，日本人がカレッジというと courage（勇気）に間違えられやすい．knowledge [náliʤ| nóliʤ] も口を大きく空けてノレッジと言う．ナレッジと読む人がいるが，通じないかもしれない (null edge?)．(every)body も（エブリ）ボディと言えば間違いない．ボディ (body) がバディ (buddy) にならないように．

[j] の音

英音でユー [ju:] の音が米音ではウー [u:] に近い．例えば New York，student は英音ではニューヨーク [nju:jɔ́:k]，ステューデント [stjú:dənt] であるが，米音ではヌーヨーク [nu:jɔ́rk]，ストゥーデント [stú:dənt] に聞こえる 注 4)．assume，consume は英音ではアスューム [əsjú:m]，コンスューム [kɔnsjú:m] であるが 注 5)，米音ではアスーム [əsú:m]，コンスーム [kɔnsú:m] に聞こえる．

日本では英音が定着したものと米音が定着したものがある．スーパー（super [sú:pər]）は米音であり，英音はスューパー [sjú:pə] である．tuner と tuna はスペルは違うが英音は同じであり，共にテューナ [tjú:nə] であるが，米音では前者はトゥーナー [tú:nər]，後者はトゥーナ [tú:nə] となる．ラジオのチューナーは英音が，マグロのツナは米音が定着したものであろう．一方，tutor は米音はトゥーター [tú:tər] であるが，英音のチュータ [tjú:tə] が定着している．intuition は英音ではインチューイション [intju:íʃən]，米音ではイントゥーイション [intu:íʃən] であり，米音に親しんでいる人が多いのではないか．

これらは [j] の音を入れるのが本来で，抜かすのはアメリカ人の癖と考えられるから，日本人は [j] をきちんと発音するのがよい．

ory, ary の音

これもアメリカ人の癖とみなせる．ory, ary で終る語は英音では弱いアリ [əri] であるが，米音では [o], [ɛ] を強く発音し，かつ伸ばすので，それぞれオーリー [o:ri:]，エアリー [ɛəri:] になる．だから laboratory, factory は英音ではラボラトリ，ファクトリであるが，米音ではラボラトーリー，ファクトーリーと聞こえる．secretary, ordinary は英音ではセクレタリ，オーディナリであるが，米音ではセクレテアリー，オーディネアリと聞こえる．日本人は真似する必要はない．

3．真似る必要のないイギリス英語

[ou] の音

これはイギリス人に特有な発音である．米音では狭いオ，またはそれに弱いウをつけたものであるが 注 3)，英音ではオの音が極端に狭くなり，アウと聞こえることが多い．例えば home は米音ではホームであるが，英音ではハウムと聞こえる．もちろん日本人は真似る必要はない．

語末の y

ly, ty, dy などの語末の y は米音では口を横に開く狭い [i:] であり，長めに発音するが，英音では口を中を広げる広い [i] であり，短く終る．だから city は米音ではシティー（または t が有声化してシディー）であり，末尾は tea と同じである．しかし英音ではシテと聞こえる．同様に carry はキャレ，study はスタデと聞こえる 注 6)．日本人は広い [i] が苦手なので，アメリカ式の狭い [i:] の発音のほうが楽である．

単母音の二重母音化

アクセントのある母音の [i], [u] の次に [ri] の音が来ると英音では二重母音化して [iə], [uə] となる傾向がある．例（前が米音，後が英音）：serious: シリアス [síriəs] → シアリアス [síəriəs], material: マティリアル [mətíriəl] → マティアリアル [mətíəriəl], experience: エクスピリアンス [ikspíriəns] → エクスピアリアンス [ikspíəiəns], curious: キュリアス [kjúriəs] → キュアリアス [kjúəriəs], furious: フュリアス [fjúriəs] → フュアリアス [fjúəriəs] .

また ~ization は [~izeiʃən] と [~aizeiʃən] の二通りの発音があり[注 7)]（civilization, minimization, quantization など），di~ も [di~] と [dai~] と二通りの発音がある（direct, digest, dimension など）．英米で異なるということではないが，二重母音化は英国のほうが多いようである．

日本人は二重母音を 2 音節化して発音する傾向があるので，それを避けるために米式の単母音として発音するのがよいと思われる．

二重母音

[iə], [uə] の広い [i], [u] は米音ではやや狭い [i:], [u:] に変化するので，日本語のイア，ウアに近い．しかし，英音では広いままであり，[ə] が弱いので，例えば fear [fiə], sure [ʃuə] はフェー，ショーのように聞こえる（ただし fair, shore とは口の空け方が違う）．日本人は広い [i], [u] が苦手なので，米式の発音が楽である．

三重母音

三重母音 [aiə], [auə] は米音では [ai]+[ə], [au]+[ə] のように二重母音と弱い単母音の組合せとして 2 音節風に発音されるが，英音では一体化した 1 音節として発音され，アーアと言っているように聞こえる（ただし日本語のアとは口の空け方が違う）．例えば wire, fire, science はそれぞれワーア，ファーア，サーアンスと聞こえる．また hour, sour もアーア，サーアと聞こえる[注 8)]．

もちろん日本人は真似する必要はない．それよりも，日本人はアイア，アウアと 3 音節化しがちなので，米風に強弱をつけた 2 音節に発音するように努めるのがよいと思う．

その他の非標準発音

ロンドンを中心とする下町では [ei] を [ai] と発音したり（デイ day がダイ die と聞こえ，オーストラリアにもその影響が残っている），h を抜かして発音したりする．また地域によっては [ɔ] が [u] になったり（バス bus がブスに聞こえる），[ai] が [ɔi] になったり（パイプ pipe がポイプに聞こえる），その他さまざまなイギリス特有の発音がある．これらはもちろんイギリスでも標準とはみなされていないので，日本人が真似する必要はない．

3. それ以外の米英の相違

発音，アクセントの相違

米英で発音やアクセント位置が異なる単語も多い．例（前が米式，後が英式）：garage [gərɑ́:ʒ| gǽrɑ:ʒ, -riʤ][注 9)], laboratory [lǽb(ə)rətɔ:ri:| ləbɔ́rət(ə)ri], trajectory [trəʤéktɔ:ri:| trǽʤikt(ə)ri], controvercy [kɑ́ntrəvə:rsi:| kəntrɔ́vəsi], kilometer [kilɑ́mitər| kíləmi:tə]．また aluminum [əlú:minəm], aluminium [æljumíniəm] のように，アクセント移動に伴ってスペルが変わることもある．一方，アクセント位置が同じでも発音が違うこともある．例：suggest [səgʤést| səʤést], privacy [práivəsi:| prívəsi], leisure [lí:ʒər| léʒə], vitamin [váitəmin| vítəmin], lieutenant [lu:ténənt| lefténənt]（刑事コロンボの職名）．母音の長短も多少変化する．例： museum [mju:zí:əm| mju:zíəm][注 10)], room [ru:m| rum] （classroom [klǽsru:m| klɑ́:srum], bathroom [bǽθru:m| bɑ́:θrum] など）．これらはどちらを聞いても戸惑わなければよく，自分で言

いやすいほうを言えばよい．

スペルの相違

米英でスペルが違うものも多い．これはアメリカの辞書編纂者ウェブスターがそれまでの複雑な英式スペルを簡素化した辞書を売り出し，それによって米式スペルが定着したものである．例（前者が米式）： ∼ter ← ∼tre （centre, metre, litre など），∼or ← ∼our （honour, labour, neighbour, favour など），∼zation ← ∼sation （minimisation, optimisation など），acknowledgment ← acknowledgement．これらは ispell などのスペルチェッカーのオプションを用いれば，英式から米式またはその逆に変換できるが，機能は完璧ではないらしい．

用法の違い

発音，アクセント，綴りのような表面的な違いよりも大きいのは用法の差である．これは国が違い，生活習慣も違うので当然である．例えば自動車の各部の名前は米英でほとんどすべて違うと言われている．また，挨拶を始め，日常生活に関する広範囲の物や動作の言い方が異なる．この米英の差をまとめた「辞書」も発売されている．今はやりのハリー・ポッターシリーズの「原書」には英語版と米語版の 2 種類がある [注 11)]．

しかし日常生活に関係ない学問の世界では差がないらしく，論文の英語に関しては私は英米の差の違いに気がついたことがない．

4. おわりに

会話において相手に瞬時に理解させるには，前回も述べたが，他の単語と聞き違えられないように異なる母音や子音を「区別する」ことが個々の音をどう発音するかよりも重要である．

もちろん発音だけでなく，他の意味と混同されないように，なるべく一つしか意味を持たない単語や表現を選ぶのがよい．ただ，普通の日本人は単語や表現の選択に夢中になって，自分や相手の発音にまで注意が届かず，思い込みで聞いて日本語の発想で話すのが普通である．

熱心な人はラジオ，テレビ，テープ教材などで聞き取りの練習をするが，ほとんどの人は「意味」をとることに集中し，辞書を引いたり（あれば）テキストを見たりする．その結果どう発音されたかが記憶から抜け落ちる．私は意味は無視して音声に集中し，どのような音として発音されるかを聞き分ける練習を勧める． （終わり）

注 1) 英音でも次に母音が来ると r の音が現れ，例えば store and ... はストーランド... [stɔ:rənd...] となる傾向がある．store の名詞形 storage（保管，記憶装置）はストーリッジ [stɔ́:riʤ] だが，“ストレージ” と書く誤りはどこから来たのだろう．語末を “激怒”(rage [reiʤ]) と類推したのか．激怒したくなる．

注 2) can の正式な否定は cannot [kǽnɔt] である．日本人の論文で can not と書く人がいるが，これは誤りである．

注 3) 前回にも述べたが，not と note の違いはオの後にウがつくかどうかではない．o が広い音 [ɑ|ɔ] か狭い音 [o] かの違いであり，ウがつけなくても狭いオなら note である．

注 4) ただし，当の米国人は [ju:] と言っているつもりでいる．しかし英国人に比べて [j] の音が非常に弱く，ほとんど聞こえないことが多い．

注 5) 日本語ではどちらもシューと書くが，su のスュー [sju:] と shu のシュー [ʃu:] を混同しないように．前者は口を細めた狭い空間を通り抜ける澄んだ音であり，後者は振動を含んだ濁った音である．

注 6) 日本人は論文（特に学位論文）のタイトルに Study（または A Study, Studies）on ∼ と書く人が多いが，on は抽象的な分野を導く前置詞であり（on mathematics, on computability など），個別の対象 of である．Study on a fast method for ... など滑稽である．ある米国人教授が，日本人の老教授に of が自然ではないかと忠告したところ，その教授から絶対に on が正しいと説教されたと苦笑していた．日本人は on だという信念を持っているので，私は学位審査の時期が憂鬱だ．

注 7) 英国では ∼isation と綴ることが多い．

注 8) 試しに英国人にアームタード (I am tired) と言ってみるとちゃんと通じたが，一緒にいた日本人は誰も私の言った意味がわからなかった．私がその英国人に「何と言ったかわかるか」と聞くと，なぜわざわざ聞くのかけげんな顔をし，こんな初等的な英語を日本人が分からないのを不思議がっていた．私は 2 音節に発音したが，日本人はこの文をアイアムタイアドと 6∼8 音節に知覚しているようである．

注 9) garage を “ガレージ” と読む誤りも storage と同じ日本人の先入観であろう．

注 10) museum を “ミュージアム” と読む日本人が多いが，これは誤りである．

注 11) 洋書店のカウンターでハリー・ポッターの原書を買いに来た客が店員から「英語版ですか米語版ですか」と尋ねられて当惑していた．アメリカとイギリスで英語が違うとは思いもしなかったようである．